

## キスカ島撤収とソ連の参戦

神奈川県 柏木 孜

昭和十六（一九四一）年三月、私はそれまで勤めていた茅ヶ崎第一尋常高等小学校の職を辞し、大東文化学院に入学しました。入学式は四月十五日でしたが、偶然にも四月十日に召集令状が届きました。それには「四月十五日正午東部第七十八部隊（東京市村山）に入隊すべし」とありました。十二日頃、私は大東文化学院の制服制帽姿で父と東部第七十八部隊の下見に行きました。立川駅からバスに乗って、降りた所は畑の真ん中で、そこは兵営でした。父は衛兵に「この部隊は野戦部隊かどうか」と質問していたようです。野戦部隊なら、戦地の第一線に出動しなければなりません。

友人たちが集まり、日の丸の旗にそれぞれ署名をしてくれました。私は日の丸の旗の右隅に大き

く「生死達観」と墨書しました。普通なら「生死達観」と書くべきところを、あえて「生死達観」と書いたのは、私の心の中に必ず生きて帰るというひそかな思いがあったからです。十三日頃でしたでしょうか。私は弟と二人で最後の見納めになるかもしれないと江の島で遊びました。帰りに小田急の江の島駅の右手にある茶店を見た時、何と白い饅頭がケースの中に並んでいるのです。当時は砂糖なども配給制で、どの店でも餅菓子などは売っていませんでした。私は大喜びでその饅頭を買おうと店に入り、ケースの中をよく見ると、何と白い瀬戸物細工の模造品だったので。私は今でも江の島駅に降りると、昔ながらのあの店があり、あの時の悔しさを思い出すのです。

入隊当日の十五日は、大きな旗に「祝出征柏木孜君」と記した旗を先頭に、軍楽隊が軍歌を吹奏し、在郷軍人や町内会の人が、日の丸の襷を学生服の肩にまいた私や、父のあとから長く続き、横浜駅まで見送ってくれました。

東部第七十八部隊は高射砲の部隊で、村山の平坦な畑の真ん中に、広大な演習場と大隊本部、各中隊の兵舎四棟、いずれも木造二階建の建物が並んでいました。私と一緒に入隊した者は四十人位で、私は第二中隊に編入されました。

当時の軍隊は一個分隊は二十人位で、内務班と呼ばれる一部屋で生活します。部屋の中には銃架があつて整然と小銃が立ち並び、部屋の左右は木造のベッドに藁布団が敷かれ、隅に毛布四、五枚がきちんとたたまれ、壁には各自の銃、帯剣などを吊り、上の棚には日用品を入れる手箱と称する木箱と、着替えの軍服や襦袢、袴下がきちんと長方形に折られ重ねられています。

部屋の中央には木製の粗末な大机と長椅子があり、これが食卓にも、机にも、銃の手入れをする台にもなります。班長は下士官で、各班には班付の上等兵が二人位いて、これが中心になって軍人としての日常生活上の躰を教育し、更に古兵と呼ばれる二年兵（軍隊生活二年目の兵）三年兵がお

り、肩章の星二つの一等兵が五、六人おります。新参の二等兵の新兵は、これらの古兵の戦友とよばれる関係になり、一人の古兵に、一、二人の新兵が割り当てられるのです。

そして、新しい新兵が入ってくるまでの約一年間は、新兵は自分の戦友となった古兵の衣服の洗濯、軍靴の手入れ、銃剣の手入れ、食事の用意など一切の面倒をみることになるのです。ですから、古兵は本当に軍隊用語の「神様」で、新兵はただ古兵となる日を思いつつ一年間、じつと辛抱するのです。軍隊については、いろいろと社会一般常識を超えたことが数えきれない程ありますが、これらは既に戦記や手記でご存知だと思います。

当時の国際情勢は、昭和十六年四月から始まった日米交渉では、日本軍の中国からの全面撤兵を要求するアメリカと、満州事変以来の中国侵略の既成事実をあくまでも守り抜こうとする日本との間では、双方が基本的態度を変えないかぎり妥協の余地は全くないところまで来ていました。

そして、昭和十六年十二月八日、ハワイ真珠湾の空襲とマレー半島奇襲上陸で、日本は米、英と戦争を開始したのです。私達の分隊は、即日村山貯水池の要地防空を命ぜられ、貯水池の堰堤の傍らに高射砲二門を備え付けて、堰堤の擬装作業や演習に明け暮れました。

昭和十七年七月、北海道旭川市にあった独立野戦高射砲第二十二中隊和田隊に転属になりました。この部隊は父が気づかっていた野戦部隊です。そして同年九月二十七日、我が中隊はアリニューシャ列島キスカ島の守備を命ぜられ、「ボルネオ丸」という六、〇〇〇トン余りの老朽船に乗せられて小樽港を出港、九ノットという低速でまだ見ぬ戦場へと赴く運命になりました。北海道の果の宗谷海峡を通って千島列島にそって北上し、ベーリング海に出ました。来る日も来る日も全く島影を見ず、ただ一面の海原で、時々飛魚の群が船の後を追うように跳びながらついて来ました。

その頃になると、もうほとんどの兵が船酔いに闘ったのです。敵の三機は編隊をとりて三方から船に襲いかかり機銃を掃射し爆弾を投下します。下から見上げると、飛行機の胴体の弾倉がパツと二つに開くと、二個の爆弾が銀色にキラキラと輝き、まるでおもちゃのように並んで弧を描きながら船の上空を横切ると海面で炸裂します。そうすると、幼い時に見た「日本海大海戦」の絵と全く同じように、太い水柱が船のマストの高さまで立ち上がるのです。「うん、こっちの高射砲も当たらないが、敵の爆弾も当たらないものだな」と思いながら砲を撃ちつづけていると、突如、一機が船の進行方向から真直に突こんできました。「これは危ないぞ」と思った瞬間、左右の舷側近くの海面に二発の爆弾が炸裂し、「ボルネオ丸」は、ふわっと一瞬大きく浮き上がりました。そして、その一機を最後に三機は海上はるかに飛び去りました、中の一機はエンジンから黒煙を吹いて、長い尾を引いていました。

「ボルネオ丸」は、後で聞いた話ですが、この

なって、おまけに、三度の食事の菜がかれの煮付けばかりで、その臭いが鼻について喉も通らない有様でした。十月十五日の正午近く、その日は晴天で私たちは甲板に寝転んで話に興じていました。ちようど、上空には大きな丸型の白い雲がぼつかりと浮かんでいました。と、突然その雲の中から、高度二千メートル位の低空で飛行機が忽然と姿をあらわし、船を横切つて飛び去りました。全く、あつという一瞬の出来事でしたが、私たちは、はつきりとその翼に丸に青い星を画いたアメリカ空軍のマークを見たのです。もう、船酔いどころではありません。全員直ちに砲の位置について戦闘準備をしました。

それから三十分もたった頃でしょうか。高度千メートルの低空で三機の飛行機が船を目がけて飛んできました。「目標、敵一番機、高度千百、航速百、航路角零、三発、撃て」中隊長の号令で船上に備え付けられていた三門の高射砲は一斉に火を噴きました。私達にとっては、生れて初めての戦

最後の至近弾で被爆、船体にひびが入り、浸水したので、ポンプで排水し続けたとのことです。とにかく、その戦闘で兵達の船酔いも一ぺんに吹っ飛び、その日は昼夜を徹して全員で敵の潜水艦攻撃や、空襲を監視し、甲板に立ったまま明け方を迎えました。翌十六日、午前九時、私達の船「ボルネオ丸」は、やつとの思いでキスカ島七夕湾に錨を下しました。それにしても初めて見るキスカ島の何と荒涼とした、奇怪な風景だったでしょう。岩のごつごつとした浜から、なだらかな丘陵の頂まで木という木、草という草は一本も見えず、灰色の荒い岩膚をむき出しにしていた。裾は一面茶褐色のツンドラに覆われて、そのそばには点々と木造の兵舎らしいものが並び、前面の平坦地にはシートで覆われた糧秣や弾薬が野積にされていました。

キスカ島はベーリング海上に東西に点在するアリニューシャ列島の最西端に属し、アツツ島の東約五百キロに位置し、東西四キロ、南北十キロ程

の細長い島です。昭和十七年八月以来、南東太平洋における米軍の反攻が激しくなったので、北東方面も反攻に備えて急遽、同年六月中旬、海軍の兵隊が主力の北海支隊がキスカ島に上陸、守備を固めていました。私たちの部隊は上陸後、敵機の空襲に備えて直に海岸近くの平坦地に陣を敷きました。十月七日、午前九時三十分、十機程の戦艦連合の敵機が来襲し、湾上の「ボルネオ丸」と海岸揚陸地点を中心に爆弾を投下、銃撃をして行きました。轟音とともに私の中隊の高射砲も一斉に火を噴きました。爆弾の炸裂音と共に地上の直径一メートル余りもあるかと思われる大石まで、小石と共に上空に舞い上がり、私達の火砲に降りそそぎました。私はふとその時、昔何かの映画で見た戦闘シーンの一コマを思い浮かべました。その戦闘で私の中隊は、その日三人の戦友を失いました。

夕闇の迫る頃、中隊全員海岸に整列し、薪を井桁に組んで、その上に戦友の屍を乗せ、若い日蓮

ルを越す猛吹雪の日も少なくはありません。私達は一分隊ずつ約十五、六人がグループになって、大きな円型の幕舎の中で生活したのですが、時には、その幕舎が吹き飛ばされはしないかと思うような吹雪の日も少なくありませんでした。

昭和十八年一月、私達の部隊はキスカ湾口の陣地に移動しました。この付近は、キスカ島の中では一番部隊の集結している所で、キスカ湾には日本の水上戦闘機も十機程いて、対戦態勢を整えていました。飛行場の格納庫では時には映画も上映され、また、大きな浴場もできていて兵隊が交代で入浴できました。しかし、この平和は一刻も長くは続きませんでした。

一月中旬、この島から東約百キロ離れたアムチツカ島に米軍は飛行場を建設したというのです。一方、我が軍も、前年十二月頃からキスカ湾に近い平坦地にトロツコの線路を引いて、シャベルとつるはしで毎日何百人の兵隊や徴用の工員の人達が飛行場を建設し始めていて、約六カ月で完成す

宗の僧であった兵が澄んだ声で読経し、茶毘に付すための火が一斉に放たれました。暮れなずむキスカの山々の稜線が広重の藍を溶かしたような夜空に浮かび、澄んだ読経の音が静寂とした海面に流れて行きました。私たちは、一瞬、「ここは戦場だ」という思いに還るとともに、日本の故郷に残して来た両親、妻子を偲びました。それから、一週間に一度空襲がある位で呑気なものでした。

やがて、北の孤島に足早く冬が訪れました。前にもお話いたしましたように、この島には一本の木もありません。山は岩山で裾はちょうど座布団を敷いたように厚くふわふわとしたツンドラといわれる苔に覆われています。ですから、燃料は「ボルネオ丸」で運んできた石炭と、海岸に打ちよせられた流木を集める他はありません。食料といっても、もちろん野菜などは一切育たず、海岸で釣をすると鰈がとれる位のもので、すべて日本から運んで来た糧秣に頼る他はありません。冬は零下一〇度位まで温度は下り、風速二〇メートル

の予定でした。ところが、米軍は、アムチツカ島上陸後わずか一カ月で飛行場を完成し、戦闘機を飛ばしていました。後に聞いたところでは、米軍は丸い穴のあいた鉄板を平坦地に敷きつめて飛行場にしたのだそうです。とにかく、それからは毎日のように空襲がありました。

三月には春日山という高地に陣地を変えました。そして、忘れもしません。四月十六日、B24コンソリデーデッド機の大空襲があり、私の分隊の掩体（高射砲陣地に掘った直径六メートル位、高さ一メートル五十センチ位の壕で、その中に高射砲を据える）の縁に、その中の百キロ爆弾が炸裂し、分隊員十五人中十三人戦死、奇跡的に私と山本という戦友（現在大和市南林間に住居）の二人は、火砲を操作していた位置が、爆弾の炸裂した反対側で、高射砲の砲身を支える直径七十センチ位の架橋とよばれる鉄製の柱の陰だったので、わずかの負傷で一命をとりとめました。敵機は三機が空中で火だるまとなって墜落していったそうです。

すぐに、二人は野戦病院に入院し、山本君は一月後に内地に送還され、比較的傷の軽かった私は、また中隊に復帰しました。

その頃、アツツ島には米軍が上陸し、激しい死闘が繰り返されていました。そして、五月三十日、アツツ島二千有余人の日本軍の守備隊は玉砕しました。

「雲霧と嵐と氷の一年を送りて 玉と砕けしか、ああ」歌人、川田順がアツツに散った若き数千の命を悼んで詠んだ歌です。

それからのキスカ島に対する米軍の空襲は熾烈を極めました。夏の夜は、いわゆる白夜で、午前二時頃になるともう空が白々と明るくなつてきて、先ず米軍の偵察機が上空を旋回して行きます。そして、朝八時頃から、午後五時頃まで入れ変り立ち変り、戦闘機、爆撃機が空襲に来ます。主な目標として爆弾を落す場所は、電波探知機、高射砲陣地、そして、半分位造成のなつた飛行場の滑走路でした。ですから、私たち砲兵は昼食をとる暇

臼井という四十歳近い軍曹と発電機の壕の中で会いました。そうすると、その軍曹は私の傍に来て「柏木、まあ聞いてくれよ。俺には内地に妻とまだ小さい二人の子を残して来ているんだ。俺は、妻のことは余り考えないが、妻が再婚でもして、また新しい父親でも来ると、二人の子はどんなにいじめられるだろうと思うと、死んでも死にきれないよ。だから俺は妻に、俺が死んでも決して再婚しないでくれと遺書に書いたんだよ」と、さめざめと鬚面に涙を流して語るのでした。私は暗然として、なぐさめの言葉もありませんでした。しかし、今になると、その軍曹の嘆きが分かるようです。

六月に入ると、ベーリング海の暖流の関係で、島は一面濃霧に覆われるようになりました。それは時にはもう一メートル先の人影も見えなくなる程の濃霧でした。そして、この頃になると、この春日山の高地に、黒百合や名もしれぬ高山植物の草花が一斉に咲き揃い、私達の心を慰めました。

も無く、炊事当番の兵が運んでくれる飯盒に詰めた飯を、砲側でかきこんでは戦闘をする始末でした。

その頃になると敵の駆潜艦がたえず島の周囲を回って偵察し、補給のため食糧、弾薬を運んでキスカに向かった輸送船も次々と撃沈され、数千の尊い若き生命と、貴重な食糧、弾薬が海底の藻屑と消えました。僅かに月一回位、我が軍の潜水艦が夜陰に乗じて入港し、若干の人員と荷物を降ろし、負傷兵を乗せて、すぐに出港して行きました。

六月の初め、中隊長から全員の将兵に、遺書、遺髪を出すようにとの命令がありました。もう、私たちは生きて日本に帰れるなどとは誰も思っていないのでした。私は、何かの本で読んだ、クレオパトラの最後の言葉だと言う「死は、人間のあらゆる困難や行き詰まりを幸福に解決してくれるものです」という一語に深い感銘をおぼえていましたので、全てを傍観した気持ちでした。

そんなある日、私は日頃は余り親しく無かった霧の日は、空襲も休みとなるので、高地を歩くと幅一メートル位の小川が流れ、木綿針の先を曲げた釣針にごはん粒を付けて沈めると山女のような小魚が釣れ、海岸まで降りて行くと百メートル位先の海中にトドの群れがたわむれ、釣針を垂れると、あこうだいのような鰓えらの色で身が青い奇怪な魚が釣れました。そんな一刻は、しばらくの間激しい戦闘も、自分がキスカという孤島にいることさえ忘れられました。

その頃、大本営では五月二十八日戦闘司令所を北千島に進めて「ケ号作戦」と呼ばれるキスカ島の撤収作戦を進めていました。キスカ島周辺に発生している濃霧の中にかくれて巡洋艦、駆逐艦を突出させて、一挙に五千五百人の将兵、徴用工員を救出しようという作戦なのです。十月三日頃、全軍でキスカ島周辺の戦没者慰霊祭がおこなわれ、その席上、中隊長から「ケ号作戦」の発表がありました。私達は、全く突然、生きて帰れるという期待に心が躍りました。

十日、午後五時、第五艦隊が入港するので全員海岸に集結せよ、という命令で、五千有余の全員が整然とキスカ湾の海辺に整列しました。

翌二十九日も朝から深い霧がたちこめ「午後〇時、全員海岸に集結せよ」の命令がありました。午後一時三十分、低い垂れこめた湾内の霧を破って巡洋艦「阿武隈」を中心に七隻の駆逐艦がその雄姿を現わした時、全将兵の胸にはじめて「生還」の実感が湧き、涙が頬を伝わりました。かくして、全員五千八百八十三人、一兵も損せず奇蹟といわれた撤収作戦は完了したのです。八月一日、私達は全員、千島列島の最北端に属する幌筵島（バラムシルトウ）に無事上陸しました。

九月十八日、軍司令官より、私達の中隊に対して感状が授与されました。この感状は、現在靖国神社宝物館に飾られています。

千島列島の島で、わずかに四キロの海峡を隔ててソ連のカムチャツカ半島に接している幌筵島には、すぐ海峡一つ隔てた占守島（シムシュトウ）と併せると約四万人近

のお節料理が出されたことを記憶しています。冬は吹雪の日もありますが晴天の日が多く、積雪もそれ程深くはありませんでした。

しかし、南方洋上の島々の戦闘は日々激しく、日本本土も空襲による激しい戦火に包まれ、敗戦の様相が色濃くなってくるのを感じました。そして五月頃になると、零戦も全機南方に転出し、航空用燃料を入れたドラム缶までも再度内地に送られて行きました。米軍機による偵察も毎日定期便のように行われるようになりました。それが不思議に八月十二日を境にピツタリと止んだのです。

忘れも知ません。八月十五日の朝のことです。ちょうど私は週番下士官の当番の日でしたので朝、隊長室に今日の日課を聞きに行きますと、隊長は暗い顔をして、まだベッドに横になっていました。「本日、正午に全将兵を集会場に集めるように」と命じました。そして、正午全員の集合が終わると、隊長は惨然と涙を流しながら日本軍の敗戦を伝えました。私達将兵は茫然としてその言葉に聞

くの将兵が守備をしていますが、それらの将兵が向こう二年位は持たせている食糧と弾薬を地下に築かれた壕中に保管されている大要塞でした。

低地はツンドラに覆われていますが丘陵地帯にはハンの木の林もあり、硫黄山と呼ばれる標高千メートルの山頂からはかつては文字通り硫黄を採掘していました。日魯漁業の大きな罐詰工場も幾つか点在していて、四月から八月にかけては毎年数百人の女工員が内地から独航船で渡って来ます。独航船が漁に出ると船一杯に鮭鱒を積んで帰り、これ等の工場で罐詰にされます。罐詰は日産二万个といわれていました。さて、空襲はと言いますと、全くキスカ島とは地獄と娯楽の違いようで、週に三回位米軍の偵察機が一万メートル近くの高度で島の上空を飛んで行くだけでした。

昭和十九年になると三十機位の零戦も配備され、島の中央の高地に飛行場も完成しました。私達は専ら洞窟を掘って将来の戦闘に備えました。食糧も豊富にあつて、昭和二十年の正月には十品近く

き入っていました。ある者はこれからどうなるのだろうと前途に不安を覚え、ある者はこれで生きて帰れると感じ、暗然たる中にも一縷の光明を見たいがしました。

ところが、翌十六日の昼近く空襲警報の知らせがあり、私達も火砲に着くと、五機の見なれぬ飛行機が上空に飛来して爆弾を落とし始めたのです。赤い星のマークのソ連軍機でした。何と云うことでしょうか。それまで一回も姿を見せなかったソ連軍の飛行機が終戦になってから爆撃に来たのです。司令部の指揮も思わぬ事態に混乱を極め、「今日は撃墜せよ」と命令が下ると思えば「次の日は必ず撃墜の公算大の時のみ射撃せよ」と次々と変りました。そして、十八日には激しい艦砲射撃の掩護の下、ソ連軍四千人が占守島に上陸しました。占守島には日本の軽戦車大隊が駐屯していました。「今こそ死に花を咲かせ」と二十歳前後の若い戦車兵は三十数台の戦車に乗って縦横にソ連軍に突入し、上陸軍の半数を海岸線で粉砕しましたが、

ソ連兵の対戦車銃に装甲板を打ち抜かれて全員玉砕しました。

それから占守島はいったん停戦となり、軍使が往き来して八月二十一日、日本軍全軍の武装解除が決定しました。その頃時を同じくしてソ満国境のソ連軍は怒濤のごとく満州に侵入しました。そして千島列島の全軍はソ連軍の占領下となったのです。

私たちは部隊を解散させられ、千人単位の捕虜部隊が編成されました。そして私は、それから幌筵島で一年間、樺太で二年間、わずかな燕麦、粟、稗等の食糧を与えられて、製材、土方、丸太流送、台車に砂の積み込み、沖仲士などあらゆる重労働に従事しました。これらのことについては既に何冊も体験をもとにした本が出されていますので、私も今更思い出して書く気もいたしません。

とにかく、三年後の、昭和二十三年十月、私はやつと樺太真岡の港から復員船に乗ることが出来ました。捕虜の頃「新生命」というソ連軍の発行

している日本語新聞をよく読まされましたが、それには日本の国は大飢饉に見舞われ数百万人の餓死者が出ているとか、家を失った者、職のない者が町に溢れていて、あなた方が帰国しても生活できないからソ連に帰化して新しく甦りなさいというような記事で埋まり、樺太に住んでいた農民の人の多勢の方々がソ連に帰化したようです。ですから、私たちはとにかく日本に帰ったら国の再建に力を尽くそうと願っていました。

復員船に乗り移った時、船室の入口で船員さんが一人一人に「長い間御苦労様でした」と頭をさげられた瞬間、私も「ほんとうに長い間御苦労だった」と自分を慰める気持でいっぱいになり、思わず涙が頬を伝わりました。そして船室で落ち着いた時、あの「りんごの歌」が拡声器から流れて来ました。ひさかた振りで聞く日本の歌、その明るいメロデーを聞いて、今までソ連で聞かされた、餓死者に溢れた暗い印象の母国日本に、明るい希望の灯が引揚げ者の心にともったものでした。

早朝、復員船は函館の港に着きました。ちょうど沖から何隻ものいか釣り漁船がいかを満載して戻ってきましたが、船上の漁師の人が、復員船の甲板に鈴なりに並んだ引揚げ者に向かって、いかを何匹もつかんでは投げ、つかんでは投げ入れました。いかは青く澄んだ空に白く光ってゆるやかな弧を描きながら、復員船の甲板に投げ込まれる度に、引揚げ者や兵の間から歓声があがりました。祖国日本の人の暖かい心が私たちの胸を揺さぶりました。そして各人の心に今更のように生還の思いが波紋のように拡がり、形容できぬ喜びが湧いてきました。

その夜は広い会館のような建物で引揚げ者の慰労の催しが開かれ、舞台でいろいろな演芸がくりひろげられました。私達は、もう気の狂ったように、熱烈な拍手を繰り返しました。そして翌日、それぞれの郷里に向かって復員船も散って行きま

した。  
私は上野駅で「歓迎 柏木孜」と書いたのぼり

を持った二番目の弟に迎えられました。その時、始めて、父母、一番下の弟は健在だが、すぐ下の弟は沖繩の海上で餓死した旨を聞かされて涙が出ました。

神中線（今の相模鉄道）に乗って星川駅の傍を通った時、傍の野球場で野球をしている人々の姿を見て「あの人たちは何を食べて、あんなに元気に動いているのだろう」と疑問に思ったことを今でも覚えています。その頃は餓死者数百万ということが頭の中でいっぱいだったからでした。横浜の家は焼失し、父母と弟たちは大和のバラック建の寮の中で生活していて、私もそこに落ちつきまし

### 【解説】

昭和十八年五月十二日、一万二千人の米軍がアツツ島に上陸、守備隊の日本軍二千六百人は、島も米艦隊に包囲され、脱出も困難な中、五月二十日、突撃を敢行して全滅、大本営は翌日「全員玉

砕」と発表した。かくてキスカ島守備隊の命運も風前の灯となり、キスカ島守備隊の撤退は企図を絶対に秘匿し、霧を利用し、潜水艦を以て撤収する方針が六月上旬に決定された。

この撤収作戦は、六月以降、種々の計画がなされたが、遂に第五艦隊主力の巡洋艦「那智」をはじめ十九隻の艦艇は七月二十七日、幌筵海峡に出撃し、キスカ島に接近して、二十九日午後一時三十分、キスカ湾に入港し投錨した。

キスカ守備隊は直ちに乗船を開始し、体験記執筆者が記録するように五千八百八十三人は一人も残さず五十分で乗船を終え、帰航も順調に経過して、七月三十一日、及び八月一日に無事千島に上陸した。

連合軍はこれらの動向を全く察知することなく、撤収後約二週間、百六回にわたる爆撃と十五回の艦砲射撃を加え、五月十五日に至り初めてキスカに上陸したという。

かくして我が軍の米ソ戦略の遮断、米本土を指

向する戦略と位置付けられた西部アリューシャン列島の占領作戦は、これにより終焉することとなった。

#### 『キスカ島の概況』

体験記執筆者が記録するように、『キスカ島』はアリューシャン列島に属する無人島で、そのアリューシャン列島はアラスカと共にアメリカがソ連から買収した火山列島である。立木は一本もなく、平地はツンドラ地帯で雑草が生え茂り、ヤマスマイレ、キク、アザミ、スマイレに似た桜草等が、六月下旬から八月上旬まで咲き競い、お花畑のようなところがあちこちに見受けられる。そのころツンドラの中には、種々の小鳥が卵を抱き、足の踏み場もないほどであるという。日の出は八時ころ、太陽の直径は一メートルほどに見え、光に映える頬が熱く感じる。日没は翌日の午前五時ころ、いわゆる二十一時間ほどが白昼で、夜は三時間程度である。

北端には「キスカ富士」といわれる千二百メートル

ルほどの山がある。鉄のような固い黒褐色の溶岩が山を蔽い、丘、大地、峠がつながり、一時間に五十センチ掘れば最高の出来で、ツルハシの先がすぐに丸くなる。しかし掘るには大変であるが、防空壕を掘削するには防備上最適であった。

島には青キツネ、白キツネ、銀キツネがおり、養殖のためか所々にキツネ小屋があつた。

海にはアザラシ、オットセイが住み、鱒、オヒヨウ、鱒、鱒、鮭などの宝庫である。有名な霧はとくに五月下旬から七月下旬まで激しく、これが終わると清流に鱒、鮭類が遡上する。